

越境する気功の文化的価値の変化について

—日本に滞在する中国人気功師のライフヒストリーから—

木内 明

I. 緒言

近年、日本には気功を生業の手段として滞在している中国人が少なからず存在する。しかしながら、彼らがいかなる技能を有し、どのような滞在条件で就労し、いかにして生活を営んでいるのかといった、中国人気功師をめぐる社会的な状況については、ほとんど知られていない。そのような社会的無関心をもたらす情報の欠如を等閑に付したままにするには、もはや彼らの存在はあまりにも大きくなってしまっている。

2009年の時点において、日本国内にいる外国人は、外国人登録者数だけでも215万人（法務省入国管理局 2009）。そのうちの60万人が香港や台湾を含む中国人であり、全体の28パーセントをも占める。中華人民共和国で国民の海外渡航規制が緩和される前、1980年の同統計によれば、その数は約5万人に過ぎない（表1）。つまり、現在日本にいる中国人の多くは80年代以降に来日し、生活の基盤を築いてきたことになる。その事実を、中国人気功師と、彼らが施す気功の供給市場も、概ねここ20年の間に俄かに形成されて来たものであることを物語る。

本研究は、日本において気功に携わる中国人気功師の存在を可能たらしめている様々な社

会、文化的な条件を明らかにすることを目的とする。それらを論じることで、日本における気功の社会、文化的な意味の解明にさらに迫ることができるかと考えるからである。そこで、本稿では、どのような経緯を経て彼らが日本で気功を職業とするようになったのか。そのキャリアの変遷過程を中国において気功技術を習得するステージをも含め、気功師のライフヒストリーを再構成し、記述しようと思う。

その際に、一つ目の論点として、気功師がいかにして気功を日本人相手に扱い、どのように日本人に受容されているのか、その就労類型を提示する。そして二つ目として、気功師といえども外国人である限り、言葉や文化、法律など様々なバリアが想定される。社会的な弱者とも言える中国人気功師が日本で気功を職業として施術する上で、どのような困難が存在するのか明らかにする。その上で、気功師としての存在を確立させるための環境として、どのような文化的な価値観が日本社会に成立しているのかを探りたい。

II. 研究方法

1. ライフヒストリー研究

このような問題意識は設問調査によるデータ処理では容易には捕えがたい。外国人という社

表1 外国人登録した中国人の数

年度	1975年	1980年	1985年	1990年	1995年	2000年	2005年	2010年
人数	48,728	52,896	74,924	150,339	222,991	335,575	519,561	687,156

会的な弱者ゆえに、滞在状況が留学ビザなど、自由な就労が認められない条件に置かれている者も少なくない。さらには、実際に気功で身体の疾患を治すとはいえ、それが医療行為と解釈されると、法律的な問題にも抵触するため、なかなか表に出にくい部分がある。また、気功自体が多様を極め、気功師の間でも異なるスタイル、技術が混在していることから、社会的な連帯、同業者のネットワークが希薄であることも考えられる。つまり、明確な母集団を規定して切り取ることが極めて難しい。しかも、一般的な日本人とはライフスタイルを異にする、特殊な異文化の中にあるため、総体的に社会的グループとして理解するための条件の設定自体もまた困難なためである。

そこで、筆者は一人の気功師の主観的な視点から再構成された世界を描くことによって、異質な他者を理解する方法であるライフヒストリー法の採用をアプローチする手段として試みることにした。中国人気功師のライフストーリーを辿りながら上記の課題に近づこうと考えたのである。

とはいえ、一人の気功師の人生をそのままここで再構成することは、もとより不可能である上、本稿の課題にアプローチする上で必ずしも有効であるとも思えない。気功師の主観的な視点から構成された世界をより正確にとらえるために、「語られた生」の中から、主として気功にまつわる出来事を中心に記述し、論じることにする。その限りにおいては、桜井（1995）が言うように、「自伝的眞実」の形の過小評価や排除、時系列的編集などの問題は避けられない。しかしながら、本稿における編集操作は、いずれも課題へのアプローチをより確実に、効率よく迫るという原則に沿って行われたことを明記しておく。また、インタビューにおいて、筆者／調査者と、気功師／被調査者の双方の主体によって構築された〈いま—ここ〉の状況が、読者に伝わる際の消滅を減らすべく、語られた言葉は、筆者の語りをもメタ化し、できる

限りそのまま記述することを心がけた。

2. 手順と経過

本稿では、都内で気功を職業として生計を立てる一人の中国人気功師のライフヒストリーの語りを研究対象とする。彼が語るこれまでの半生を気功に関わる出来事を中心に再構成して記述し、そこから先述の課題に迫ろうとするものである。日本に来て中国人気功師として働いている期間が主たる考察対象となりうるが、日本に来る以前に中国でどのように気功を学んだのか、あるいは気功師としてどのように働いていたのかという部分についても詳細なデータが必要となる。対象となる気功師は、日本での滞在中の多くを気功によって生計を立てている人物を条件とした。その中から、以前にも一度インタビューを行った人物を選んだ。その人柄やキャリアについて多少知っていることもあり、ある程度のラポールを確立しながらインタビューを構成することが可能であると思われたためである。

インタビューは、2007年から3年間にわたって10回行われ、総時間数は約20時間に及んだ。インタビューのスタイルは、非構造化面接を採用し、気功に関わることのみならず、これまでの半生を一通り話してもらった形をとった。それらをすべて録音し、その後、話し手の言葉を文字データに逐語変換した。その上で、時系列に従って再構成した。彼は日本に滞在し始めて既に20年以上たち、少なくとも過去15年以上は日本語で気功の指導をしている。そのため、日本語を駆使することに特に問題はなく、インタビューはすべて日本語で行われた。少なくとも、彼の気功に関わるライフヒストリーを語る上で、日本語で説明することにおける障害はなかったはずである。なお、語りの記述文中において（ ）の中の言葉は筆者の補足記述である。

3. 調査対象

ここで本稿の研究対象となる男性中国人氣功師 S (50歳) について説明しておく。

S は現在、関東数か所で自らが主宰する気功教室や、スポーツクラブで健康法としての気功の指導を行う一方、その合間に病人に対して気功による往診治療も行っている。いずれの気功教室も立ち上げてから、すでに10年以上がたち、長い期間にわたる指導と交流の上に立脚した信頼関係は固く、教室では度々国内外での気功合宿も行っている。また、都内で気功全体の施術院の経営にも関わり、希望者の求めに応じては、その施術院でも気功治療を行うことがある。すでに来日して以来20年がたち、国籍こそ中華人民共和国のままであるが、永住者の資格も有している。日本語の読み書きには不自由せず、日本人に気功を指導する際にも通訳を使わず、すべて自ら日本語で行っている。

Ⅲ. 中国人氣功師のライフヒストリー

1. 気功との出会い

1960年、S は上海近郊の工場で働く両親のもとに、5人兄弟の4男として生まれた。

彼の幼少時代の語りの中に気功と関連する出来事はほとんどない。気功について尋ねる筆者に S は、武術を学んだこと、そして薬草を採集した経験を語った。

S 「なぜ、薬草に興味があったかっていうと理由は二つあります。一つは貧乏だから薬が買えません。だから何かあったら自分で治す。もう一つあります。2番目の兄が腎臓病と診断されて。それで、専門の本を買ってきて探して。探って帰って来てそれを洗って乾燥させて、食べさせる。飲ませる。私と父が。…それを小学校の時ずっとやってて、体とか医療にちょっとずつ興味があって。」

薬草を調べては採集していた経験は、インタビューの中で繰り返し語られた。その体験が、

薬草をはじめとする代替医療全体に対する関心の動機付けになった可能性も推察できなくはないが、後に気功師になる直接的な動機付けとなったとは断言できない。

S が通った中学校は日本の高校課程の一部までも含む4年制だった。小学校の最後の2年間、紅小兵を務め、教師の評価もとても高かったことから、進学した中学校では、入学と同時に紅衛兵に任命された。

中学校を卒業すると、ある工場の系列の2年生の工学系専門学校に入学し、就職もそのまま専門学校と系列関係にあるベアリングの製造会社に入社した。付属校での成績が優秀だったため、賃金も普通の労働者が36元のところを、S は45元を約束されることとなった。会社は S を最初から幹部候補として扱い、1年半ほど各部署を移動させながら、最終的に16人からなる模型部門の責任者を任じた。

S が気功を本格的に始めるようになったのは、この会社に勤めている時だった。

S 「武術気功を小さい時にやってて、やっぱり体に対する、もともと体を強くする、っていうのがあって、それが徐々に考え方変わって、武術気功よりも、いかに体の内部からの健康、両面の健康、肉体的健康だけの必要性は低くなって来て、そこからそういう気功がスタートしたんですよ。」

しかし、S は社内のどんな親しい人物にも自分が気功をやっていることを打ち明けたことはなかった。

S 「知らせたくない。皆そう。なぜかという別目で見られるから。気功をやっている人はおじいちゃん。若い人はやりません。気功はお年寄りのものと皆誤解している。でも私はそうじゃない。これはいいと。でも、自分がやりたくても人に分かってしまうと、イメージ的に悪くなる。」

文化大革命のころには、紅衛兵の活動スローガンの一つが「破四旧」、つまり4つの古いもの、旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を目の敵にし、社会から除き去るということであった。文化大革命が一段落したとはいえ、若い人が率先して気功をやるという雰囲気はなかった。Sは、週に2～3回は朝早く起きて公園で仲間とともに、気功に関する情報を交換しながら、学んでいた。

S「どこでどんな気功をやっているよと言って興味ある人は集まるじゃないですか。皆で行くでしょ。すると、今度はこっちでも練習場所がある(という情報が入る)。(別の)こっちもある(という情報も入る)。どっちの練習場行く?そうやって、良く言えば、(私は)たくさん勉強しているが、悪い言い方をするといろいろなグループから技を盗んでいたんですよ。」

ある日、仲間からA気功の話聞いた。調べてみると、それまで門外不出とされていた技術が公開され、全国的な普及が始められたところだった。Sも、気功を学びながら、単に自分の健康を追求するのではなく、気功を活用して、他人の健康維持に役立てたいと思うようになっていた。そんな時に、A気功が上海でも本格的に指導者を養成するコースを開くというニュースを知らされたのである。

上海の研修所の名称は上海A気功輔導站とあった。そこに通う者のほとんどが、気功について専門的に学ぶ者か、重い病気を患い、気功による治癒を望む病人だった。Sはそこで、本格的に気功を学ぶ第一歩を踏み出すことになった。

輔導站には指導者が3～4人いて、50～60名の生徒がそれぞれのレベルに分かれて指導を受けていた。内容は気の理解や流れに関する理論的な説明と、それを実際に動作に結び付けて体得させる実技からなっていた。Sは時間の許す

限りそこに通い、A気功の知識と技術を習得しながら次第に高度なレベルへと進級し、最後にはA気功の指導者の資格を取得した。

学び始めて3年ほどたった1986年、上海で全国的なA気功の研修が開かれることになった。毎年、中国各地を回りながら開催されている合宿式の研修で、A気功の指導者レベルの者が一週間にわたり施設に泊まりながら研修を受けるのである。研修には全国から100名ほどの指導者レベルの者が集まっていた。寝ている時間以外は常に気功を扱うか、あるいは気を意識しなければならないインテンシブな研修だった。

この研修を前後して、Sは自分の住んでいる地区の公園で週末に気功を教えるようになった。かつて自分が気功に関するいろいろな情報を集めては学んでいたように、気功に興味のある者が集まって来るとは、Sから習うようになった。

Sが会社を一時的に休んで、上海市内に新設された大学に入学したのが1986年。一期生として同期に入学した30人の多くが、それぞれの会社で将来を約束された幹部候補生ばかりだった。

講義内容は経済学、主として市場経済と経済管理学が中心だった。ある日、大学の友人から日本に住んでいる知人の話を聞いたことがきっかけで、自分も日本に行き、企業に就職し、大学で学んでいる資本主義社会を内側から見てみたくなった。

1983年に日本政府がいわゆる「留学生10万人計画」を発表し、受け入れ環境は不十分ながらも日本側の制度的な門戸は従前に比べて大きく開きつつあった。また、1984年には中国国務院が「私費留学生に関する新規定」を公布し、基本的に私費留学が自由になったことで、1988年以降の私費留学ブームの下地が作られていた(徐・蔭山1995)。しかしながら、現実的には、よほど社会的、経済的な条件が満たされた者でない限り、一般的な中国人にとって海外留学はかなわぬ夢だった。

Sには留学資金について、日本人に気功を指

導、あるいは気功で治療することで生活費を稼げるかもしれない、という漠然とした目算があった。とはいえ、中国医学を体系的に学んだ経験はなく、診察や施術についての専門的な知識があったわけでもなかった。Sは日本で気功治療によって生活費の不足を補えるようにするため、出発までの一年間、中国医学の知識を習得しようと、大学の授業後に、上海の病院で研修を受けることにした。

病院は大学から1時間ほどの距離にある上海市立の大きな総合病院だった。授業後につけ、夜遅くに病院から寮に戻る毎日になった。

この時点までのSの語りにおいて、そもそも気功を学び始めたのは、健康に対する関心に過ぎず、あくまでも職業とは別のものであった。ましてや日本で気功師になることなど考えていなかった。指導者になって地元の公園で教えたりしている時も、対価を得ての指導ではなく、気功に興味がある者が自然に集まる中での先輩としての指導であった。趣味の領域を超えるものではない。気功を職業にしていなかった理由については次のようにも語った。

S「中国だったら、気功のベテランが多くて、(私程度の力では)教室は開けません。」

気功が一義的な目的になっていないという点では、日本への渡航を決めた際も同様である。あくまでも資本主義社会を見たいという理由だった。日本に行くことが決まり、中国医学を学ぶために病院に通った時点で、初めてSの行動に気功を生活の手段の一つにしようという積極的な意図が確認できる。日本という異文化の中で、それまで趣味に過ぎなかった自らの技術文化に、いわゆる文化的資本、人的資本としての期待が芽生えたといえる。

2. 日本にて気功師として活動

1988年8月、日本に渡った。日本語学校に通う傍ら、渡航のために借りたお金を返済するた

め、その日から徹底的に出費を切り詰めて生活する儉しい毎日が始まった。

日本に来て2年が過ぎ、日本語学校卒業を前に、次の進学先を考えていた時だった。学校のすぐ前の道路を一台のトラックが通った。荷台に大きく「中国から気功師が来日」というような言葉が書かれていた。中国人気功師を招いて治療などのイベントを行うことを広告する宣伝車輜である。Sは、どんな人物が来るのか気になり、その番号に電話をかけてみた。

S「行ってみると、住職の人が出てきて。知っている気功師が誰もいないから、(目の前で)やってみないかと。それでそこにいた事務職員に(気を)送ったら、反応して、感じるようになって、その住職は見てて、ああ良いじゃないかと。で、はい決まり。いきなりぽっと。今日からでも仕事できると(言われた)。」

そこは関西のある寺院が経営している東京事務所で、新たに東京で気功の治療活動を展開しようとしているところだった。Sはこの日のことを運命だったと語る。実際、彼の日本での生活はこの日を境に大きく変わっていった。

S「運命でしたね。前に空手の関係の方を紹介されたことはあったけど、本質は同じと思うけど、私の(気功)は武術気功じゃないから。(空手は)健康というテーマとは違ったから。自分のもっとも得意なことで働けるようになりました。」

その時から、そこで内気功を養う指導と、外気功による患者の治療を行うことになった。最初に内気功の教室に集まったのは、その教団の関係者や信徒らを中心に20名ほどだった。ほとんどが中高年の女性で、そのうち約4分の1が、気功の練習とともに、気功治療も受けていた。その頃の日本では、気功治療を受けられる施設が少なく、治療のために事務所を訪ねる患

者はたちまちに増えた。とりわけ癌患者など、重い病気を抱えている患者が多かった。

その教団で働くようになるまで、Sには留学生である自分が日本社会において何らかの存在価値があるようには思えなかったと語る。むしろ日本に居させてもらっているような居心地の悪さを感じていた。留学生でしかない自分たちへ向けられる日本社会の視線を次のような語りで表現した。

S「お前たち、いなくてもいいよ、この世界には。そういう感じなんですよ。」

ところが、気功師として働き始めてからは、Sの周囲の環境が大きく変わった。Sは、その変化を次のように表現する。

S「それまで聞いたことのない言葉を聞きました。こんな素晴らしいものを伝えてくれるなんて、私たち日本人嬉しいですよ。感激しました。そんなことを言われるんですよ。自分の置かれている状況が180度変わりました。」

アルバイトながらも気功師としての仕事を果たとはいえ、それで就労ビザを得られるわけではなく、学生ビザを取得するために、学校に進学しなければならないことになりはなかった。一時期は、大学で経済学を学ぶことも考えたが、とりあえずは気功師として働きながら安定した生活の基盤を固めることを優先させることにした。そこで、進学先は気功と関連する知識や技術を学べる、都内の療術の専門学校に決めた。その学校には留学生のクラスが二つあり、中国人ばかり80名ほどが学んでいた。

S「理由は、やっぱり、自分は気功の仕事できるようになって、今後伝えることになるじゃないですか。しかし問題が残っているものは何かって言うと、これをうまく伝えられるか、そこの。何か。一つは、普通の言葉としてやら

なきゃいけない。もう一つはそれを伝えるならば、正しい日本語ができる。それがなければ無理ですよ。気功の専門用語は通訳の人でも大変難しいから。気功のプロじゃないから伝えきれないこと多すぎる。それでやっててわかった。自分もちゃんとやらなきゃ出来ない。その言葉。その言葉って何か（というと）、体の各部分、内臓関係、病気のこととか、日本人の民間人が一般によく受ける治療。例えば、整体、マッサージとか、そんなものを（学ぼうとそこの学校を選んだ）。」

Sはこのころから、出身地の上海市と横浜市が1973年以来姉妹都市の関係にあり、その交流事業にもボランティアとして積極的に関わることになった。

教団の東京事務所で働いてしばらくすると、中国からも入れ替わり多くの気功師がやって来ては、Sの気功技術とも異なる方法で指導が行われるようになった。Sは短期的に滞在しては帰国する多くの中国人気功師たちとも気功に関する情報を交換し合い、気功の技術や知識を深めていった。Sがそこで働いている間に中国からやってきた気功師は50～60名はいたという。

気功師として働き始めて3年ほどたった1992年、その教団も東京事務所を閉鎖せざるを得なくなった。いわゆるバブル経済が崩壊したあおりを受けてのことだった。しかしながら、その頃には、Sは教室参加者とも親しくなり、教室閉鎖後も引き続き彼の教室を望む者が少なくなかった。また、個人的に気功治療を受けていた患者たちも、事務所閉鎖後もSの治療を望んだ。

S「事務所は閉鎖しましたが、残っている仕事がありました。当分の間、治療してほしいという方がいましたから。その人たちは（関西の）寺院に連絡し、治療は（私が）東京ですと（いうことになった）。二つ方法があって、一つは往診。もう一つは別の場所（を利用して治療する）。その時、私と寺院の間で契約結んで、基

本、最低生活費を保証してもらおうと。で、私はその代わりにいつでも、学校以外の時間、いつでも連絡があればすぐ飛んでく。」

事務所閉鎖後も、治療を望む人たちについてはSが責任を持って続け、そのために、今後も毎月最低限の生活保障として月給をもらう約束を取り付けたのだった。治療の要請がある度にSは渋谷にある別の宗教法人のビルの一室などで治療を続けた。

事務所閉鎖から半年ほどたった頃に、気功教室参加者らと連絡を取り、上海時代からの友人の気功師と二人で都内に「伝統気功研究会（仮名）」という名の気功教室を立ち上げた。しかしながら、一つの教室を二人の気功師で運営していくことは容易ではなく、Sはほどなくして、その教室から手を引いた。と同時に、それまで国際交流のボランティア活動で縁のあった横浜に引越すことを決めた。

横浜では、不妊治療のための気功教室を無料で開いたり、障害者向けの気功教室を格安で開催したりした。それらが少しずつ認知され軌道に乗ると、福祉会館や小学校の体育館などを借りて本格的に教室を始めた。H市でも市民講座を開いたことが契機となり、同じように教室を開くことになった。また、ちょうどその頃に、都内にオープンした高級スポーツクラブでも、会員向けの健康管理プログラムの一つとして気功教室を担当することになった。

ところで、教団の東京事務所が閉鎖されたころ、Sは専門学校の卒業を控え、もう一つの問題を抱えていた。

S「あの時代、専門学校卒業しての就職は就労ビザが下りなかった。大学卒業しなければ、だめだった。だから帰りなさいと言われて。」

その頃には気功師としてある程度やっていけそうだという見込みと自信も芽生え、もう少し日本に残って働きたいと思っていた。そこで、

Sは横浜の気功教室に来ていたある国家官僚に相談した。

S「まあ、運が良かったというか。人間関係ですよ。助けてくれる人がいっぱいいて。あの時はやっぱり気功の生徒。その紹介で、良いこととは思えないんですけど、ある国会議員を紹介してもらったんですよ。」

Sはその国会議員を訪ね、現在の状況や今後の展望などを説明した。すると、今度はその国会議員が政権与党の大物政治家を紹介してくれた。そこで、その政治家を議員会館に訪ね、同じように事情を説明した。そうして、最終的に、ある小さな出版社で気功や健康に関する記事を書くという形式的な業務を与えられ、日本に滞在するための職を確保したのである。

ところが、就職して数か月がたった頃、その出版社の社長が事故で急死し、会社は継承するつもりのない社長の息子によって倒産整理されることになった。

またしても滞在するために欠かせない勤め先を失ったSは、今度は気功教室で教えていた、一人の市議会議員に相談した。そして、中国と交流事業も行っているある障害者支援団体を紹介され、そこで再度、形式的な職を得ることになった。職を得たとはいえ、Sが会社に行かなければならないのは基本的に月に一回程度、あくまでも形式上の就職であり、主たる収入は気功が中心であることに変わりはない。

神奈川での生活が安定してきた1997年頃、健康食品の販売を手掛けている、ある小さなスポーツクラブと共同で都内A区に事務所を置き、健康食品を販売しながら気功整体を行う施設を経営することになった。始めて見ると、Sの気功整体は、周囲に同業者がいなかったこともあり、一定の評価を得ながら、顧客を増やしていった。しかし、スポーツクラブが販売する健康食品はなかなか思うように売れず、結局、そのスポーツクラブは1年ほどでその事務所

を引き上げてしまった。Sはスポーツクラブが撤退した後は、一人でそこを借り、他の地域でやって来たように気功教室も開くことにした。

横浜をはじめ、各地で開いている気功教室は、常に若干の入退会はあるが、安定的に続いた。教室で学んだ日本人の中にはSが認証して指導員となり、気功指導を始める者も出始めた。また、その間もずっと障害者支援団体に職員として籍を置き続け、5年ほどたった頃に、日本での永住者の資格も取得した。

A区での成功体験を基に、Sは同じように都内に気功整体院を開院することを考えるようになった。まず、都内に二つ目の気功整体院を開業し、施術師として2人の中国人を雇った。そうしてそこが経営の見通しがつくと、今度はまた別の場所にもう一店舗開業した。そこもまた経営が軌道に乗ると、さらに別の店舗を開く、というように繰り返し、瞬く間にSは都内周辺に10店舗の気功整体院を経営することになった。

S「最初は知り合い（の施術者を集めた）。治療できる中国人。でも、全くできない人もいて、そういう人はできる人について勉強しながら一緒にやります。練習しながら。ある程度できるようになったら、完全に任せます。」

中国人従業員の日本国内での立場や、法的な滞在条件もまちまちであり、必ずしもすべての整体師が定着するわけでもなかった。むしろ短期間で入れ替わる者の方が多かった。そのためサービス業として大切な人材の育成管理が難しく、言葉の問題から日本人客とのコミュニケーションを教育することの苦労も多かったという。

一見、成功に見える急拡大だったが、手を広げ過ぎた感は否めなかった。気功教室やスポーツクラブで指導する傍らで、10軒の店舗を営むのは容易ではなく、しばらくすると、とうとうS一人の手には負えなくなってしまった。

そこでSは、すべての店舗の経営をそこで働いている中国人たちに移譲することにした。そ

れまで基本的に給料制だったものを、各店舗で働いている者が、自分の店として経営し、利益のすべてが本人の収入になるという形にしたのである。ただし、建物のオーナーとの契約は、引き続きSの名義で行い、確定申告などの手続きも、彼が一定の手数料をもらって、代わりに行う形にした。店舗で働く中国人がみな就労ビザを持っていたわけでもなければ、法律や納税の仕組みに詳しくなかったわけでもない。永住権のあるSにそのような法的な手続きを任せる方が、彼らにとっても都合が良かった。Sの提案に応じ、もともとあったA区の店も含め、全店が新たな経営スタイルで出発することになった。しかし、Sのように経営経験のある中国人ばかりではない。治療の技術を持っているからと言って、日本という外国で一つの店舗を営んでいくのは容易ではなかった。Sの手を離れてからは、次第に経営を諦める店が出てきた。

S「2007年の3月までにすべて（の店舗の経営を）終わりにしました。なんでかと言うと、金融危機とか、いろいろな問題があって、責任とるならば、契約者は私になってますから。」

こうして、2009年時点で、Sの施術院は新宿のビルに入っている一軒のみとなった。そこも、直接的な経営には関与せず、建物のオーナーとの賃貸契約など、実際に働いている中国人に代わって、その権利関係を代行することで手数料を得ている。それ以外は、スポーツクラブや教室での気功の指導、さらには患者の家を訪問しながらの気功治療を行っている。

日本に来て20年が過ぎ、現在では、自他共に認める気功師として活躍し、今後もしばらくは気功師として生計を立てていくことを考えている。

IV. 考察

以上、一人の中国人気功師の語りをライフストーリーとして再構成したが、ここに記述したSの半生の多くの局面は、日本人にとって他者

に他ならない中国人による日本での社会的な経験であった。

ことわるまでもなく、Sのライフヒストリーが日本に滞在する多くの中国人気功師たちの生涯を典型として代表するものではない。また、記述されたライフヒストリーが、Sの「生きられた生」のすべてではないことは当然のことながら、「経験された生」、「語られた生」のすべてでもない。誌幅の制約、そして設定課題に的確にアプローチするために筆者によって必要に応じて再構成されたものである。それらのことを勘案しても、一人の中国人気功師のライフヒストリーを通じてのみ理解できる社会、文化は確実に存在した。それらが、中国人気功師のみによって体験されうる以上、そこに表出した気功の文化的な価値は、本稿で採用したライフヒストリーという質的研究手法だからこそ採録することができた体験に基づく世界であったといえる。

ライフヒストリーからも伺えるように、Sはごく一般的な中国人でありながらも、小学校、中学校では、紅小兵、紅衛兵として活躍し、専門学校では卒業時に成績優秀者として表彰される、いわゆる優等生であったことは間違いない。貧しく、共産党幹部とも縁のない身分でありながら、努力と才能によって若くして共産党に入党し、会社では入社時から幹部候補として待遇も他の労働者とは一線を画していた。来日前のこれらの経歴が裏付けるSの才能は、おそらく、どこの社会においても平均的な人々よりは成功へ到達できる可能性は高かっただろう。

そのような優れた能力の持ち主である点を考慮しても、日本に渡り、試行錯誤しながら気功によって生活の足場を固め、次第に日本社会の中で中国人気功師として認められ活躍していく姿の周辺に、気功に対する中国と日本における相対的な価値観の差異や、中国人気功師を取り巻く日本の社会的環境など、普遍性に接近できると思われる事例は少なくなかった。

本稿では当初に二つの論点を設定した。中国

人気功師が気功を職業とする際にどのような就業類型があるのか。そして、もう一つが日本に滞在している気功師をめぐる日本の社会的なバリアや、彼らを取り巻く社会的な環境とはいかなるものか、という論点である。Sのライフヒストリーの様々な局面で語られた出来事を拠り所にそれぞれについて考察してみたい。

1. 気功を活用した就労類型

Sが日本で気功によって収入を得る就労類型は、大きく三種類に分類することができる。

一つは、健康の維持、促進のため、いわゆる内気功によって体内の気を練磨する技術を指導することである。これは、関西の寺院の東京事務所で初めて気功を職業とした時点から確認される。教室などで一度に複数の生徒を対象に、身体の気を養うための技術を言葉と動作で説明しながら、指導するものである。スポーツクラブなどでは、多ければ一度に20~30人を相手にすることもあるため、対象とした延べ人数、換言すれば、気功の消費累計としてはこのケースが最も多い。日本社会において、この気功教室の需要が市場として成立していることは、Sから学んだ日本人の中にも、彼の認証のもとに指導者になっている者がいる事実からも裏付けられる。

そして、もう一つの類型が外気功を活用した病気の治療である。教団の東京事務所の時代から、癌やその他の難病の患者に対して、事務所のベッドや患者の自宅で患者に気を送り治療を行って来た。その後、気功全体の施術院が拡大している時でも、病気の気功治療は一貫して続けていた。法的な意味では医療ではないが、患者にとっては限りなく医療行為に近い施術を行っているのである。

三つ目が施術院における気功整体である。これを先に挙げた気功治療の中にも含めることも可能かもしれないが、施術院に来院する者の中にも、治療というよりも、むしろマッサージのような疲労回復やストレス解消のような癒しとし

ての技術を期待して訪れる者が多いことが語られた。また、Sのもとで働いている中国人の中には、それまで正式に外気功を学んだことがないまま気功治療院という看板を掲げていたことがあるように、必ずしも外気功の技術を必要としているわけではない。むしろ、あんまやマッサージの類似行為としての整体や推拿である。気功師本人も、気功整体を受ける者も、治療とは明らかに異なる認識、料金のもとで行っていた。そのため、ここではいわゆる外気功によって病人の治療を目的とした治療とは異なるカテゴリーとして分類した。

以上の三つの就労類型が、Sが日本人を対象に気功を使って生計を立てている手段であった。周知のとおり、気功も種類が多様である。S自身も気功の指導者の資格を有していながらも、来日前に病院で中国医学の研修を受けていた。必ずしもすべての気功師がこの三つの就労類型が可能とは明言し難い。翻って、Sの語りから、気功師によっては、この三つ以外にもいくつかの類型がありうるだろう。一つとして、S自身も来日後に日本人の空手家を紹介されたことがあったように、武術としての気功指導も気功師によっては可能だろう。さらに、Sが通っていた日本の医薬専門学校に多くの中国人が通っていたが、日本国内の医薬関連の知識や技術を取得することで、それらの技術に気功を組み合わせると、就労類型はさらに多様化する可能性がある。

2. 中国人氣功師をとりまく日本社会

多くの外国人労働者を悩ませる在留資格という問題は、Sにとっても他人事ではなかった。そもそも法的に「気功師」としての在留資格はない。永住者としての資格を取得する以前は、Sも合法的に日本に滞在するための方策に常に悩まされ、そのバリアの克服に多くのエネルギーを費やしていたように、中国人氣功師の社会的立場は決して安定したものではない。彼らは異なる理由で与えられた在留資格のもとで、

時には違法に働いているのが実情である。もとより、このような在留資格のバリアや、物価の高い日本での貧しい生活は、中国人氣功師特有のものではなく、留学生として来日し、その後も日本で就労を望む多くの外国人が経験する障壁である。ここで留意すべきは、Sがそれら社会的なバリアを自身の気功という特殊技術によって、打開したことである。

日本における気功の社会的な価値をうかがい知れる事例も、Sがそんな社会的バリアを克服した方法の中に見て取れる。日本でのビザ取得を検討していたSは、気功を指導している日本人との間で構築された関係を手掛かりに、合法的な滞在のための支援に適した人物を紹介されたことがあった。常識的には、選挙権もなく、経済的な後ろ盾もない外国人留学生が国会議員に面会し、本人自ら「あまり良いことではないかもしれませんが」と表現するような解決を陳情し、それが受け入れられることなど考え難い。ましてや、Sの場合は日本人でも面会が極めて難しい、内閣の重要なポストについていた大物政治家までたどりついた。S個人の人柄もあるのだろうが、そのみに理由を求めるには、その対価はあまりにも大きい。この例外的なケースはSが施す気功という特殊な技術文化に、その根拠を求めるべきだろう。Sから気功治療を受けている者、気功を学んでいる者にとって、治療者、指導者としてのSは、特権的な人物への紹介に値する存在だと認識されていたことがわかる。どの中国人氣功師もこのような評価や待遇を受けるとは思い難いが、少なくともSから気功の指導や治療を受けていた日本人が、気功や気功師をいかに価値ある特殊な文化、人材として認識していたかが伺える。条件がそろえば、Sが経験したような特例的な対応にあやかることがありうるくらい、代替医療としての気功に多大な社会的価値が付与されうることを証明してくれる事例である。

V. 結語

Sは中国にいる間、有償で気功を教えたことはなかった。むしろ学ぶためのコストのほうが大きかったはずであり、気功は余暇の域を超えることはなかった。日本という異文化において、いわば個人資本としての気功という文化の経済的な価値が上昇し、単なる趣味から経済的対価を求めることができる職業へと変容したのである。その変容をもたらした要因は、一つに日本社会における気功の相対的な希少性と、健康が価値ある商品として消費される市場が成立していた現代的な事情に求められる。中国にいた時、気功をやっていることを会社の同僚に伏せていたように、80年代の中国においては、気功に対して誰もが理解があった訳ではなかった。その一方で、気功の技術を有する人物が日本以上に多いことも確かであり、Sも「中国だったら、気功のベテランが多く、気功教室を開いていなかった」と語っている。S自身も高額を支払って指導者を養成する課程に通って習得したという点では、ビジネスとして成立していた一面もうかがえる。ところが、一方で、公園で気功の情報が無料で交換されているような、気功がごく身近にありふれた状況下では、単に気功を学んだ程度では、生計を立てる手段にはなりにくかっただろう。

本稿のライフヒストリーから検証する限り、中国人気功師が日本において気功によって生計を立てることが成立する条件として以下の事項が確認された。

一つに、近代医療を代替、補完する代替医療としての気功に対する日本人の高い評価である。また、気功師が中国に比べ相対的に少ない希少性も中国人気功師にとっては活躍する上で、好条件として作用している。そして、Sが歴史的に気功を育んできた文化、つまり本拠地と認識されている中国から来たことである。気功師が中国人であったことは、Sの有する技術文化の正当性を裏付ける根拠としてプラスに作

用し、気功の価値、とりも直さず気功師自身の価値をもさらに高めたのである。それらの条件がある程度備わった現在の日本の健康市場、医療市場において、Sの気功は、中国にいた時よりもその市場価値を高めることになったのである。また、中国人気功師に気功の正当性を求めるという意味では、未経験者が僅かな教育で気功師として働く就労スタイルは、どの外国人にも用意されているわけではなく、中国人にのみ開かれている限られた選択肢だと言えるだろう。中国人留学生にとって気功師や気功整体という職業の選択が、日本においてキャリアをスタートさせる身近な選択肢として存在している可能性も伺えた。Sのライフヒストリーの中に、彼以外にも日本で気功整体を施す何人かの中国人が登場する。彼が気功整体院を都内に開院していく過程で、そこで働く中国人気功師が俄かに急造された局面である。最初は気功技術を身につけている中国人の中から施術師を探していたが、そのような人物がいなくなった後には初心者にも気功整体を指導し、あるいは現場で経験者の姿を見て学ばせながら施術にあたらせていたことが語られていた。これは、気功技術の質の客観的な検証が難しいが故に起こりうることである。おそらく、即席の気功師たちは外気功で病人を治療することはなかっただろう。S自身が中国において気功を学んだ期間や方法と比較するまでもなく、日本における中国人気功師の技術レベルや、気功そのものの質にもばらつきが大きいことを、改めて知らせてくれるストーリーであった。

最後に本研究の限界についても言及しておきたい。本稿においても、ライフヒストリー法という質的研究が致命的に負う1人の語られた生から普遍性を導出することの困難さからは免れられなかった。谷(1996)は、ライフヒストリーの方法論として、一つの事例から策出された仮説を他の事例と突き合わせ、強化、修正、棄却、新たな発見などを繰り返しながら、より信憑性の高い仮説に仕上げていくものであるという。

また、構造主義的な立場から、ベルトー（1997）もライフストーリーの収集を行うことによって、それぞれのケースの個別の実態を超えて、仮説を確認し、調査者によって洗練されたモデル、つまり一般性の価値を持つモデルの飽和に至ることが可能になると指摘する。今後、さらに多くの中国人気功師に同様のインタビュー調査を重ねることで、それぞれの事例の個別の実態を超え、一般性の価値を持つ、より信頼度の高い中国人気功師の姿や、彼らを取り巻く日本社会を描くことを課題として補いたい。繰り返すことになるが、本稿で取り上げた中国人気功師の社会的な体験は、日本と中国における気功の文化的価値の差異を明らかにするものでありつつ、これまで注目されることがなかった代替医療の世界に生きる外国人というマイノリティの社会を汲み取った点でも意味があったと思われる。これまで等閑に付されがちだった中国人気功師は、実に多くの日本人と関わりながら、気功という代替医療を社会の一部に確実に定着させていることがうかがえた。本稿によって浮かび上がった輪郭をベースに、それぞれの問題意識から課題設定がより具体的にフォーカスされた発展的な研究の礎となることを期待したい。

<参考文献>

- Bertaux, Daniel: Les récits de vie: Perspective Ethnosociologique NATHAN, paris 小林多寿子訳（2003）ライフストーリー—エスノ社会学的パースペクティブ。ミネルヴァ書房、東京 p.57。
- 法務省入国管理局（2009）：平成19年末現在における外国人登録者統計について、外国人登録 592：pp.28-34。
- 徐光興、蔭山英順（1995）中国人留学生の日本留学の効果と情報に関する研究。名古屋大学教育学部紀要 42巻：pp.89-106。
- 黄健（1997）：中国における気功の科学的研究の現状。Journal of International Society of life Information Science 15巻2号：pp.371-374。

- 中野卓・桜井厚編（1995）ライフストーリーの社会学。弘文堂、東京 p.244。
- 谷富夫編（1996）ライフストーリーを学ぶ人のために。世界思想社、東京 p.23。
- 湯浅泰雄（1993）：中国の気功研究の状況。人体科学 第2巻1号：p.159。